

# 地域協働学校だより No.8

令和元年 12 月 24 日  
新宿区立市谷小学校  
地域協働学校運営協議会

「地域協働学校運営協議会」からのご報告です。オリンピック・パラリンピック企画の一環で、4年生のTボール教室と5、6年生向けスポーツ写真家清水一二さんの講演についてご紹介させていただきます。

## ジャイアンツアカデミーコーチによるTボール教室（4年生）



12月13日、ジャイアンツアカデミーから二人のコーチをお招きして、ボールを投げ方やTボールのバックホームゲームを指導していただきました。とても寒い日でしたが、カッコいいユニフォーム姿の岡本コーチと北コーチのテンポの良い指導の下、児童たちはよそ見やおしゃべりをする様子もなく楽しみながら熱心に取り組んでいました。

ボールの投げ方の指導では、ボールを持った手の甲を頭に「こんこん」、それから腰を「くるっ」と回しておへそを前に向けて投げることを、遠くに投げるときは反対の手を前に上げてその上を目指して投げることを教わり、「こんこんくるっ！」の音が響きました。バットを使わずに、投げたボールで行うバックホームゲームでは、作戦について熱心に話し合う様子が見られ、とても充実した1時間になりました。



## スポーツ写真家 清水一二さん講演会：写真で見るパラリンピック（5、6年生）

12月16日、5、6年生向けにスポーツ写真家清水一二（しみずかずじ）さんによる講演会がありました。ご自身が撮影された障がい者アスリートの写真のスライドをスクリーンに映しながら、清水さんがパラスポーツの撮影を始めた経緯や、パラリンピックにはどのような競技種目があるのかを親しみやすい語り口で教えていただきました。講演終了後も、もっと話を聞きたい児童たちが列を作って質問していました。

### はじめりは医療用写真

清水さんは、日本大学芸術学部写真学科ご卒業後、神奈川県リハビリテーションセンター病院の写真室に勤務し、治療のために怪我や手術の様子などを撮影する仕事を行っていたそうです。そこでは周りの車いすの患者さんたちに、励まされることも度々ありました。「目が悪



い人が眼鏡をかけるように、私たちは必要だから車いすを使っているに過ぎない。ただ車いすが目立つだけのことなんだよ。」「君もずっとここにいないで、いずれはカメラマンとして活躍しろよ。」などといったように。

その病院のスタッフは、患者を看護するというより、患者さんが自分の希望を自分でかなえられるようお手伝いをするようなところがありました。患者さんの一人が「もう一度スキーをやりたい」と言った時、病院のスタッフで、その患者さんがスキーをできるような用具を作ったこともあります。

もともと激しい遊びが好きで怪我をしてしまったような患者さんたちは、病院でも社会復帰のためのスポーツとして激しい車いすバスケットボールを楽しんでいました。その写真を撮ってプレゼントしたりするうちに、色々な競技の写真を撮るようになりました。



### 障がい者のスポーツを撮り始めて

清水さんが障がい者のスポーツを撮影し始めて40年以上になります。障がい者のスポーツを撮影するとき、一般的には障がいの目立つ選手の写真を撮りたがる傾向がありますが、清水さんは「この競技で一番強い選手を撮りたい」と考えているそうです。

パラリンピックは、1994年のリレハンメル冬季大会から撮影されていますが、初めは知り合いを通じてNHKのスタッフということで取材許可をもらったそうです。4年後の長野大会の際、清水さんがリレハンメルで撮った写真がたくさん飾られることになって、スポーツ写真家としての地位が確立し、その後は夏大会も冬大会も障がい者の競技を撮影することになりました。

この日は体育館の大きなスクリーンで、ご自身の撮影された写真を映しながら、20以上の競技について解説やエピソードを話してくださいました。視覚障がい者の競技では選手は音が頼りなので必ず静かにしていなければならないこと、片足切断の選手のスキー競技の場合は、どちらの足がわるいのかで撮影の向きを変えるので、撮影場所をあらかじめ考えなければいけないこと、視覚障がい者の雪上クロスカントリーは、ルートに溝を作っているため、そこを踏みつけたりしてはいけないなど、競技のルールもよく分かっていることなど、情報が盛りだくさんでした。



一方で、職業写真家として売れる写真を撮るご苦労についても少しお話が出ました。アイスホッケーならパック、テニスはボールも一緒に写っている写真でないと売れないこと、車いす陸上では顔が写るように、選手が電光掲示板を見るために顔を上げるスポットを陣取って撮影すること、そり型のスキーなど高さの低い競技では、良い写真を撮るために雪山に穴を掘ってカメラを構えることなど。

障がい者スポーツの選手は、障がいを負ってから始める人が多いので、若くない人も多いそうです。また、危険と隣り合わせのことも多く、恐怖心に打ち勝つ必要もあります。外国では戦争や地雷などで障がいを負った人もいるのだという話も出ました。

夏季パラリンピックには22種目もあるそうです。清水さんは、「色々な競技に興味を持って応援してほしい、とくに海外選手にはいろいろな人がいるので、ぜひ見てほしい。」とおっしゃっていました。東京オリンピック・パラリンピックへの興味や関心がますます高まるような講演会でした。